＜書かれたもの — Schrift — の意味＞
— R.ムジールとW.ベンヤミンにおける言語観の比較（その２）—

＜Die Bedeutung des Geschriebenen (Schrift)＞
— ein Vergleich der Sprachansichten bei R.Musil und W.Benjamin. (2. Teil)

米沢　充

「現存在を Schrift に変じてゆく勉学の方向は、一種の逆転である。」
（ベンヤミン:『カフカ論』より）

（一）

小論は、前著[1]の補遺といったものであって、その後の知見をもとに、論及が充分でなかった点をもう少し考えて行こうとするものである。ただし、R.ムジール（1880～1942）とW.ベンヤミン（1892～1940）という、20世紀前半のほぼ同時代に活躍していたが、相互には交流も影響関係も殆ど無かった二人の文学者について、何らかの関わりを示す新しい事実がみつかったわけでもなく、また、直接的な接点のない両者を並べて論じることに新しい意味を見出す研究書が現われたというのでもない。前著でも触れた、H.ベーメ[2]のほんの僅かの示唆が出発点としてあるばかりであり、本稿でもその示唆に誘われて行なう両者の比較が、依然として無謀なと思える試みであることに変わりはないのであって、せいぜいのところ前回の論旨を一歩進めるといったものになるのである。

H.ベーメの提出した比較へのヒントは脚注の中のほんの小さなものだったが、ともあれ両作家の幾分の近似性や共通性をもつ「諸関連」を有意味なものとして考察すべきではないか、というものであった。彼が言う「諸関連」とは、推測するに、物事の捉え方、思惟内容、認識論、歴史および同時代への視点、芸術や文学の理解の仕方、そして表現方法など多面的に言うのであろうが、と

りわけ言語観および言語の扱い方――言語を根底に向けて問うこと、言語を認識の基盤にすること、それに基づいて言語を使用すること、さらに、言語の美的側面の考察――などを目して言っていたようである。

ベンヤミンの方からすると、彼の独特の思想世界を、こういう直接的には関係を持たない場所ではあるが、親近する形で実現している同時代の例証が、思いがけず存在していることによって、理解への或る補助線が引かれ得るのだということを言ってもよいのではなかろうか。

ムジールの『特性のない男』において、言語が中心概念であることは容易に見て取れる所である。大事なことは、この作品を言語の3つの現象相で捉え、それらの相関関係をこの作品の理解のための構図とすることである。

①操作された、イデオロギー的な、あるいは道具化した言語――つまり、多かれ少なかれ主体を作りあげるとともに気づかれない間に主体の地位を簒奪する言語（小説中の「同じようなことが起こる」の世界の、ハイデッガーのいうdas Manの、ベンヤミンのいう「饒舌」（Geschwätz）の世界の言語）、

②主体にとって他者なるものによって書き込まれた、脱日常化した、狂気の言語（モースブルッガーとクラリッセ）、

③前二者とは異なる可能性を拓こうとする、主体を問う言語（小説では、主人公ウルリヒと妹アガーテとの愛の追求の言語）。

この3つの領域のそれぞれの登場人物たちがそれぞれに<言語>と向かい合っているのである。

作者であるムジールは、言語を意識した時代の産物として、『特性のない男』の文学世界を自らの思惟空間として押し拡げたのである。彼はそれぞれの人物らに言語を与えつつ、彼らのそれぞれのやり方で自らの言語を省察させる。そして作者としては書くという行為に携わることによって、自らの言語のありようを更に省察せざるを得ない構造となる。古典的小説とは異なって、ここでは書き手は書くとともに自ら書かれる、という関係が多少とも存在するテクストとなる。

テクスト概念の拡大はすでに4半世紀も前にR．バルトらによって考究された。古典的な観念から、作者をテクストの始源とする考え方を脱却して、テクストは流動化して、読んでいるそのつどの<ここ>と<今>において、すなわち多数のSchrift（エクリチュール）の交差する所に成立するものなのだ、としている。バルトは「現代的なテクスト」の特質を、意味の複数性、多義性、

引用や参照や反響などにあると考える。[3]

突き詰めて考えると、そのようなテクスト性は、ベンヤミンが考えたような、Schrift が根源的なものの痕跡を留めているということを、＜今のここ＞において読み解こうという歴史的営為の強調と共通するものがあるといってよかろう。「特性のない」書き方という意識は、すでに意味の複数性を内包している。「あらゆる統一性を失った主体」[4] であるとか、「引用符のついていない引用」[5] とかは、ベンヤミンにも類似の表現があるし、ムジールにもそのような主体とそのような文学とを志向していたことを窺わせる発言がある。

このようなムジールの作品の特質を捉えて、Th. ペカールは「言語の小説」Roman von Sprache と呼んでいたのであった。[6] 彼は、『特性のない男』での種々の愛のテーマと言語との結び付きに対してその呼び名を提出したわけだが、書き手そのものを含めた、もっと広い意味をこの語にもたせることでこの小説を理解する必要がある。

異なった意味合いではあるが、J. ヘーリッシュはゲーテの円熟期の小説『親和力』を論じて、「言語小説」Sprachroman という呼称を与えている。[7] そのように捉えてこそ、ヘーゲルの『精神現象学』の同時代者であるゲーテ自身が、「自分の最良の本」と見做したこの作品の真の姿を浮かび上がらせることができるというのである。現象学と精神分析学と記号学的言語学とが打ち揃った現代でこそ、この作品は読めるものとなった。彼が立脚するのは、ハイデッガーからJ. デリダにつながる存在記号論（Ontosemologie）の存在了解である。『親和力』では、名前、記号、発言、手紙、本などが、人物らの自我や存在と交差して、謎である現存在が言語的記号化されている、というように解するのである。我々もここで類似の読み解きを考えてゆくことになる。

このような学的方法論を明確には持つことなしに、ベンヤミンは当時としては異例の深さの『親和力論』（1922年）を書いたが、そこには殆んど直感的に存在記号論の近くにある存在了解が基底になっていると見なしてよかろう。同じJ. ヘーリッシュはベンヤミンに関する別の論文で「ベンヤミンは、存在（Sein）それ自体は言語的に構成されている、と考えている。それが、ベンヤミンの思考の隠れた中心である。」としている。[8]

（二）

前回の拙論では、ムジールの作品世界における「言語」の持つ内容・形式両

面での意味と、自己の哲学的・認識論的思考の中心に「言語」を位置づけたベンヤミンの場合とを比較しつつ、意識と存在、悟性と感情などの＜合一＞であるとか、純粋言語への志向性であるとか、それぞれにあって表現形式あるいは認識内容としての弁証法的関係にある＜比喩＞（ムジール）と＜アレゴリー＞（ベンヤミン）の持つ意味とかをなぞり、結論というわけではないが、両者に於いて一つの到達点としてある、Schrift の概念に辿り着いたのであった。

ムジールの場合、『特性のない男』を肯定的にしろ否定的にしろ＜文学小説＞として読めるわけだから、Schrift は作品及び作家の活動の場として当然浮かび上がって来るが、ベンヤミンの場合、Schrift は彼の概念体系の中で必ずしも明瞭な規定をなされているわけでなく、他のものと比べて重要な役割を与えられているのでも無いのであるから、当然視するのは少々無理があるように見える。しかし、彼の全仕事を通じて見、また今日という視点から見た場合、更に今日の知の自己省察が自ら産出した認識方法から見た場合、ベンヤミン当人の意図したものばかりでなく、それを更に越えて Schrift を中心概念の一つとして捉え、そこから関係性を組み直すという形で、この概念に新しい強勢された意味を与えようとする研究者が出て来ているのである。

ムジールの場合とベンヤミンの場合とでは同じ Schrift 概念といっても重なり合い、共通する部分は全面的ではあり得ず、一部に過ぎぬであろう。しかし、その重なり合う部分とは現代の文学理論あるいは認識理論から照射されているのであって、言わば同じ方式で作動するキーワードとして考えてよいのである。

さて、その Schrift であるが、訳語としては＜書かれたもの＞＜文書＞＜書＞＜書字＞などが与えられようが、ぴったしの訳語はない。今日の理論で用いられるフランス語そのままの＜エクリチュール＞という語に相当するとしてよい。ここではそのまま Schrift を使い、時には＜エクリチュール＞という語もその拡がりを持つ概念幅のゆえに用いてみよう。次に、それの意味する内実の定義は当面措いて、外的・形式的側面の性格づけを試み且つ一定の限定を加えておくことにすると、言語のあり方として何らかの形で＜書かれたもの＞を核としているのであって、単純化して言うと、音声言語（発話、言葉、及び内心の声も含め）に対する文字言語の現れ、ということになろう。

Schrift は、＜実体としてあるもの（書かれたあるもの）＞、＜観念的存在としてのそれ＞、そして＜比喩として考えられたもの＞、の三つに分類してよかろう。＜観念的存在＞というのは曖昧な表現であるが、実体と比喩との中間に

位置し、実体化していないが、さりとて比喩ではなく、原理的に実体化しうるもの、或いはフィクションの中では実体的なものとして扱われている語なり文を想定するための操作概念を考えておく。文学作品の場合この意味での Schrift を理解することが重要である。比喩としての Schrift とは、例えば「自然という書物」とか「水に書かれた文書」とかいわれているようなものであり、また、失われた文字や未解読の文字のごとく実体的ではあっても比喩的であるのとは差異がないものまでも含んでよかろう。間にある観念的存在としての Schrift は実体化の方へぐっと近づきその前段階にあるもの、つまり Präfiguration であり、潜勢力である場合もあり、逆に比喩的なものとの境目あたりまで来てしまうこともあろう。ということは、3つの様態を流動化しておかねばならないということになる。

また、Schrift はどこに存在するのか、つまり、誰が書いたのか／書くのか、という問題にも一応の答えを用意しなくてはなるまい。時間軸で考えると、相当長いスパンでの歴史的な Schrift や、一人の人間の人生の届きうる範囲での過去に発するもの、そして書かれつつある現在及び書かれるであろう可能性としての未来がある。これらには「読書」とか「引用」とか「相関テクステュアリティー」とかの概念が対応する。空間軸で考えると、不特定多数的に書かれて、主として本や諸々の文書の形で存在するいわばコーパスの形態から、直接的には書き手が現に書いている文、また文学作品の中では人物らによって書かれるものまで、Schrift は二重化あるいは場合によっては三重化という重複性を持つとしなくてはなるまい。ここでは、一方では先に観念的存在と呼んでおいた Schrift は、人物らの発話すらも文字の形で現れる書かれたものとして、言わば一種の物質性においてあるということから、他方では精神分析学において「無意識は言語的構造を有する」とされるほどに、無意識の中へ書き込まれた Schrift の存在にまで及ぶ。そうしてもう一点、第3の次元として、語と文という対立を巡る問題も Schrift にはある。

このように多義に亙る Schrift 概念であるが、今共通的に取り出すべきことと言えば、何らかの機能的性格をもつ Schrift というものは、記号論でいう「シニフィアン性」を持つのである、と考えればよい。つまり、意味される内容（シニフィエ）として見るのではなく、Schrift が書かれた語ないし文として、或る主体に対して意識の場であれ、無意識の場であれ、「意味するもの＝シニフィアン」として作動しているものである、ということを常に念頭に置いておくべきであろう。

（三）

独特の歴史哲学を展開するにあたって特異な言語論と認識論を基盤に据えているベンヤミンの著作のいくつかの箇所に、あたかも躊躇すべき副産物か留保であるかのように、Schrift への言及が見られる。

現代の開始期での「言語についてのただならぬ不安感」（Ｊ．デリダ）を形象化したＨ．ｖ．ホーフマンスタールの『チャンドス卿の手紙』（1905年）に示されたような思考状況の中で青年期を迎えたベンヤミンが、哲学的文学的出発点の最初から言語の問題に出会ったであろうことは当然想定できる。自身ユダヤ人であったベンヤミンに対するユダヤ思想の持つ意味はさまざまな関連で説明されるが、『言語一般と人間の言語について』という論著で初期の本格的な言語思想を展開しつつあった1916年の５月頃、神学者Ｍ．ブーバーからその主宰する雑誌『ユダヤ人』への寄稿を求められたベンヤミンは、正しく自分の抱く言語観からしてそれを断るのである。この拒否は、第１次世界大戦の勃発によってそれまでの「青年文化運動」が解体していった政治状況と無縁ではなく、彼の『言語論』では、言語の分断という事態の克服の契機を、正統ユダヤ的な＜文字言語＞のもつ政治的制度的権力構造に抗して、その対立物をまさに＜原・言語＞であるアダム的言語――ユダヤ思想の根源――という考え方に求めるのである。ベンヤミンは自らアンチテーゼを抱えこんだと言うべきであろう。そして彼は Schrift に期待を寄せるのである。

ベンヤミンにとっては、伝達の道具に堕した、政治的・目的志向的言語使用の超克をアダム的原・言語の方へ向かって模索して行き、自然の事物の名を呼ぶといういわば音声言語の純粋さを措定しようとするのであるが、歴史の中で書かれたもの（Schrift）の聖性をも評価するという矛盾とも言える位置に立つことになる。ルソーが峻別した音声言語と文字言語という２様態の間をあたかも Schrift の聖性が架橋するかの如く。つまり彼は、Schrift に原・言語の特質である「無媒介性」を見るのである。

言語の本質的な作用の仕方を、内容にではなく、言語の形の中に、つまり「言い表しがたいもの」を結晶として示し得る形の中に見ようとするベンヤミンは、Schrift には「言語の魔術」sprachliche Magie が備わっているとするのである。その場合、宗教的な Schrift と芸術的―文学的― Schrift とが考えられている。Ｍ．ブーバー宛の手紙の一節を引用しよう。

「<書かれたもの>（Schrifttum）一般はその作用に関して言うと、文学的なもの、預言的なものとして、いずれにせよ魔術的なものとしてのみ、つまり<無＝媒介＝的>にのみ理解できるのです。 Schrift のもつ治癒的な作用、内奥においては破壊的ではない作用は Schrift の（語の、言語の）秘密の中に存しているのです。（中略）言い表しえぬものを結晶の如く取り出すということは、本来的に即物的な、冷静な書き方（Schreibweise）と一致するものだと、そして言語的魔術のまさに内側にある、認識と行為との関係を示唆するものだと、私には思えます。（中略）

言葉が<実際の>行為よりも神的なものにはより遠いところにある、とは私は考えません。つまり、言葉もやはり、かならずそれ自身を通して、それ自体の純粋さを通して神的なものへ到り着くのです。言葉は手段となってしまうやはびこるだけです。」（B.Br.I,126 f.）

そしてベンヤミンは自分の考え方を「非ユダヤ的」であるとは考えないとして、併せてユダヤ思想への深甚な関心を表明している。この手紙の前年には後にユダヤ思想の大家となるG.ショーレムとの交友が開始している。上記の手紙の中で「預言」（Prophetie）という概念が文学と並置されているのは、神と自然と人間とが互いに呼び掛け合うアダム的原・言語の痕跡を核心にもつとされる言語の一種の宗教性と関連することであり、神との契約を記して旧約聖書の預言が、正しく Schrift であって、そこに「書き表しえぬもの」の存在しうる形式があるという認識なのであろう。ベンヤミンの初期から中期への思想的発展の時期に、言語論の深化とユダヤ思想への傾倒があったわけである。

ここまで辿ってきたベンヤミンの思惟の図柄を描けば、およそ次の如くであろう。彼によると、現代の文化の衰弊・危機――それは道具的合目的的理性への偏倚に由来すると理解されているが――と言語の伝達的道具的性格の膨張とはパラレルな現象である。そのような言語に基づいた歴史主義的観点からは、歴史の進歩という理念から見られた連続体としての歴史しか見えてこない。この認識枠を打破して「真理」を獲得する（wahrnehmen）ために、言語のもつもう一つの存在様態である，根源的な、直接的で啓示的な形姿を問おうとしているのである。

この初期言語論『言語一般…』の中には Schrift に関する記述がない。だが、同時期に書かれた上掲のM.ブーバー宛の書簡では、Schrift は言語が「魔術的」magisch に「無＝媒介＝的」un-mittel-bar に現れうる場所として考えられて

いた。それは、言語のまさに道具的・伝達的形姿であるというべきSchrift がそれとは逆の性質を備えているということ、つまり『言語一般…』で述べられた、神による事物（自然）と人間、存在と意識との結びつきの証しである原・言語の痕跡を＜魔術的＞に＜無＝媒介＝的＞に保持していることを示しうるのがSchriftであるということなのである。

ベンヤミンは、上述の如き二重性／二面性をSchrift のみならず、言語自体の本性の中にあるものとしている。一つのものの中に二つの相反する作用をする力は、いわば弁証法的関係にあるということになる。そしてそのようなものとしてある言語の中から「言い表しがたいもの」das Unsagbare を結晶として取り出すべき「所与の、我々の手近にある」形式がSchriftであるということなのだ。書くという行為がそのようであるべきだとすると、既に在るアルヒーフとしてのSchrift の中にも「言い表しがたいもの」が備わっていて、われわれはそれを＜読ま＞なければならないことになろう。

ベンヤミンは、H．ホーフマンスタールの劇『塔』にある「決して書かれなかったものを読む」という一句を引き出して、後年の言語論断篇『模倣の能力について』(1933年）の中で一つのテーゼとしているが、そこでは＜読む＞ことの内に一瞬ひらめく、「言語の記号論的なものと模倣的（＝直接的）なものとの融合」(B.II,S.213)という弁証法的プロセスが瞥見されている。このような考えを根拠にしてベンヤミンは、「理解」ということを或る意味での歪曲や誤解をも採り込んで拡大して考え、＜誤読＞や＜理解しがたさ＞にも生産力を認めようとした、ドイツ初期ロマン派の思想から糧を得ている。[9] 生産性と結びつけることによる彼の独特の批評概念が初期ロマン派に基点の一つを有することは周知のことである。

ここで、少し唐突な感じを与えることを敢て承知で言えば、ベンヤミンが言っている、言語における「言語の記号論的なものと模倣的なものとの融合」という発想、つまり二元論の克服のイデーに対応するものは，ムジールの場合、さまざまなレヴェルでの「合一」の要請ないし探究にあると言ってよかろう。

ムジールにあっては、比喩（Gleichnis）は二つの物事・事態の媒介項による比較であり、それは思いがけぬ新奇な表現を目指すレトリック手法であるにとどまらず、異なるもの・対立的なものの合一、融合、ジュンテーゼを示す、認識上のまた存在論上の概念にまで拡大されていた。それはまた『特性のない男』の創作原理の一つともなった。現実のある事物、ある状態が、別の或るも

のの比喩的存在であるかもしれない、あるいは逆にある事物、ある状態の比喩として意識された表現が、より真実の現実を把捉するものだるかもしれない。それは、複眼的で、絶えず否定性をしみ込ませる思考法であると言える。そしてその実現の場所として、「書かれたもの」= Schrift を想定することができることになるのではないか。

（四）

ベンヤミン自身が言語の内部での「記号論的（=道具的）なものと模倣的（=直接的）なものとの融合」という考えを持ったのだが、M.ブレッカーはそのような対立的なものの統一、一致、合一、二元論の克服の相のもとに、初期ベンヤミンの思想形成を理解している。[10] 彼が提示する予定調和的な解釈は、ベンヤミンの後の思想展開、とりわけ独特の歴史哲学や権力／法にかんする思想とどう係わっていくのか、にまで充分には及んで論じられてはいないこともあって――彼はそのことは自著のテーマの枠を越えるから、と断ってはいるが――、彼の論述は手堅いものではあるとはいえ、やはりもの足りなさを感じさせずにはおかない。

M.ブレッカーはベンヤミンの初期言語論にとって、それに先行する或いは周辺的にある諸作品の重要さを強調している。彼はその論著の中で、対立する二つのものとして様々な対概念を挙げて、そこにはベンヤミンの「合一哲学」があるのだというような理解をしている。試みに主だった対概念を挙げると、＜理性と自然＞＜知性と感性＞＜有限なものと無限なもの＞＜主観と客観＞＜自我と世界＞＜世俗的なものとメシア的なもの＞などなどである。そして彼は、言語や生（経験と歴史）や芸術（文学）に於いては対立的なものは統一体――「リアルな全体性」――を成しているのであって、それらの絶対性は「真実内容を内閉するが故に」[11]、それを読み解くべき哲学的分析や美学的コメンタールが必要になってくるのだ、としている。

ムジールにあっても、「合一哲学」がキーワードになっていることはもとより、美や芸術作品に備わるトータリティーに生を近づけようという志向が存することをここで思い合わせてよかろう。

当時の青年文化運動の只中から独自に二元論の克服を模索していた頃のベンヤミンの初期作品を、彼の言語論にとって重要であるという観点から、幾つか

採り挙げて見ることにする。

『学生の生活』(1915年) はベンヤミンの歴史哲学が早くも萌芽の形で表わされているスケッチとして注目された。それは、進歩観に基づく歴史主義に対して反対の志向をもち、歴史が全ての可能性を込めて集中する特異点 (「究極状態」) において顕れるだろうユートピア的形象を捉えることだ、というような表現をしているのである。ムジールの<可能性感覚>の概念や「別なる状態」(der andere Zustand) の現出のイデーを連想させるものと言ってよかろう。

> 「究極状態の諸要素は、(……) 最も危険にさらされ悪評を受け嘲笑された作品や思想として、常に現在にも深く埋め込まれている。(……) その究極状態を (……) 現在の中に目に見えるようにし、支配力を持つようにするのが歴史的課題である。(……) [そのようにして] 現在に於いて認識しつつ、未来をその歪んだ形から<解き放つ>ことのみが大事なのだ。そのことのためだけに批判は奉仕する。」(B.II, S.75)

この歴史観は衆目の一致するとおり、ベンヤミンがナチスに追われて自死を遂げることになる年の春に纒められた『歴史の概念について』(1940年) に至るまで、基本的に変わることなく深められていった。そこでは、「過去の救出」や「歴史の連続性の打破」あるいは「メシア的時間のかけらが散乱して入りこんでくる<今のこの時> (Jetztzeit)」というような、大変暗示力に富む思想が展開されている。

若き日の美学的哲学を基礎づけようとして『ヘルダーリンの二つの詩』(1915年)の中でベンヤミンは、詩と生の中間にあって作動するとされうる「詩作されたもの」(das Gedichtete) の統一という独特の考えを持ち出して、想像する精神の根源に迫ろうとしている。ここで彼は、情緒というナマの生感情をさらけ出したヘボ詩 (Stümperei) とは異なる、生の或る絶対的状態を描き出して、真の詩となるための原理のようなものとして、「詩作されたもの」を仮定し、それを人間の生に統一を附与する「神話的なもの」の概念に類比しつつ追究して行く。美学的な「形式と内容の一致」とは違った、「根底的に存在論的な状態」[12] なのである。状態 (Status) ではあるが、詩の生成にあたっては機能的なものと了解されている。それをベンヤミンは「同一性の原理」と呼ぶのである。

「この法則は、(……) ついには、すべての詩的連関の中心において、すなわち具象的な形式と精神的形式との相互の同一性を生み出すのであって、即ち、生と同一 (identisch) である、一つの精神的統体、つまりは「詩作されたもの」の中での、すべての形姿の空間的時間的な相互浸透を作り出すのである。」(B.I,S.112)

言語論の基底をなしている初期作品の中からもう一つ『若さの形而上学』(1924年)と題されたエッセーにも触れておきたい。これはベンヤミンがそれまで携わって来た青年文化運動の変質を目のあたりにして自ら方向を模索しながら自己の創造の根拠づけを行なうマニフェスト文の如くにも読めるのだが、核となる思考を孕んだイメージを自由連想的に繰り広げる、飛躍の多い、それだけに触発性の高い、捉え難い文章である。(その故かブレッカーはこの作品に言及していない。)「対話」「日記」「舞踏会」という3つの断篇においてテーマとなっているのは、自我 (Ich) の創造的実現の場としての<時間>、堕落した言語を純化すべく沈黙に向かう言語、過去の中に埋没した事物が<私>の時間と出会うことでの賦活という、他の作品にも共通する問題である。

「<日記>は，そのような忘却の中で (……) しかし救済された思いの中で成立したものである。(日記は) 決して生きられなかった生の究明しがたい<本>であるし、(……) その如き生の時間の中で、われわれが不十分にしか体験しなかった一切が、全く実現されたものへと変容するのである。(……) 日記は<解放の行為>なのだ。」(B.II,S.98)

<日記>が「解放である」というのは、言語に対する<沈黙>に相当するものを日記が<空隙>として抱えこむことに由来し、宿命的な時間的連鎖を断ち切って、そこで「私」(Ich) が、純粋な時間を持つに到るからである。つまり日常的体験世界で流れる時間とは別の時間、過去を蘇えさせる「私」(Ich) が司る時間の実現として、日記は比喩的に考えられているのである。

ところで、我々の関連から興味深いのは、「対話」と題された章での、言語と沈黙をめぐる<男性性>と<女性性>の対比の議論である。狡猾に侵入して支配する道具的言語を男性の、沈黙を女性の本質とし、愛欲(エロス)の側から「対話」の賦活を見ているのである。

「沈黙と愛欲——対話では永遠に分離しているが——は、一つになった。対話の沈黙は未来の愛欲であり、愛欲は過ぎ去った沈黙である。しかし女たちの間では、対話の眺めは沈黙せる愛欲の境界から生じて来た。そこでは、暗い対話の若さとでもいうものが光り輝きながら生まれた。本質が輝きを放ったのだ。」(B.I,S.96)

「対話」の章の中に、創造性を秘めたエロスを司る人物として＜娼婦＞が出て来る。娼婦は文化的制度の内側にあってその制度を逆説的に飛び越える存在であることが、含意されている。男にとっての手段化された性愛の対象が娼婦であるのに対して、娼婦の方は＜沈黙＞を対置する。

この時期に書かれた友人への手紙では、同じテーマについて、「僕らは文化の前では物体であり物品であらざるを得ない。(……) 僕らは誰も皆＜売春者＞なのだ。」(Br.I,S.67)というような表現がある。手段化され、物化・物象化された人間の言語は、先にも触れた「饒舌」(Geschwätz) であり、娼婦の沈黙とパラレルに、対極としての＜沈黙＞が模索される。それは＜純粋言語＞と置き直してもよいであろう。

我々は、言語と愛との結びつけ方に注目すべきだし、また、ここに引用した「対話」の章や友人への手紙の中で、一人の人間の中に男性的なものと女性的なものとが互いに浸透しあって同居している、という考えが述べられて言ることにも着目したい。

なぜなら、R.ムジールにおいても既成の文明の制度の中で制御される言語に対して真正の言語は愛との係わりの中で模索されるし、ベンヤミンが男の言語に支配される女の言語は気違い的 (wahnwitzig) であるとしているように、ゴチャゴチャになった時代を映すあの特異な存在・クラリッセの狂った言語は、主人公ウルリヒによって、また作者ムジールによって、事態の関係が逆転してゆく地点にまで追究されてゆくからである。

さらにまたあの「日記」の章では、既成の文化の連続的時間の中に生じる＜空隙＞を捉えることによって＜私＞ (Ich) がそこでは甦りうるとして、そのいわば＜原・風景＞の中にベンヤミンは「一人の少女」を登場させる。

「＜風景＞は我々に恋人を送って寄越す。我々は風景の中以外には何ものとも出会わない。そして風景の中では未来のみがある。(……) 彼女の目覚めは、夜、目に見えぬまま日記に向かって生じる。これこそ日記の中で

の愛の姿だ。」(B.II,S.100)

これは，ムジールの『特性のない男』での妹アガーテの存在をほとんど予測させると言ってもよい。ムジールは、ウルリヒとアガーテという、いわば鏡像関係にある双生児の兄妹の近親相関的愛を設定して、両性具有の神話と実際の現実との二重化した空間を小説内に開いて、ベンヤミンのいう＜男性性＞と＜女性性＞の、本来ならば越え難い差異の乗り越えを暗示した。F.マイヤー＝ゾクルは、その論著のある箇所で思いついたようにぽつんと、ムジールの言語は「両性具有的言語」だと呼んでいるが、[13] それは彼が言うごとくに単に一切の二元論を融和しているというだけに留まらず、兄妹の愛の両性具有的内容が両性具有的言語において、形式として実体化しているということを意味すると解さねばならない。

ベンヤミンの初期言語論の一年半後に書かれたものではあるが、関連づけて採り挙げるべき作品にもう一つ『来るべき哲学』(1918年)がある。M.ブレッカーに倣って言えば、悟性と感性との統合を目指してということになろうが、ベンヤミンはより多く感性に基づく「経験」の概念を拡大することによって、カントの認識論の「改変と修正」とを行ない、より広い創造性の根拠を追究しているようだ。そして彼はその可能性を、「認識の言語的本質」を省察することの中に存するもとの考える。

ここで注目されるのは、ベンヤミンがテーゼとアンチテーゼの間にはジュンテーゼ以外に、第4のカテゴリーではないにしろ、まだ別の関係が有りうるとして、「非・ジュンテーゼ」(Nicht-Synthese) の可能性を示唆している点である (B.II,S.166)。この概念はこれ以上は敷衍されていないので、何を意味しているか不分明なのだが、経験概念の拡大との関連において、また、綜合ということを単純に有りうるとは考えまいとする志向として受け止めることができよう。

この作品をめぐるメモの中には、実現されなかったが、「文字記号 (Schrift-Zeichen) と言語の関係」を追尋する予告がある (B.VI,S.32f.)。記号(Zeichen)一般は、そのつどの現れにおいて連関した配置を成す。その配置 (Configuration) が何らかの意味するものに意味可能性を組み入れるのだが、その作業こそが解釈である、というような考えが述べられている。

我々は、ここに、後の＜星座的配置＞(Konstellation) のイデーに相当する

概念と＜文字記号＞とが、解釈の新しい方式を導き出すものとして関連づけられているのが見て取れるのである。

（五）

ここまでベンヤミンの初期作品の中でのSchrift概念をその周辺的な関連事項にも及んで追ってみたのであるが、この段階では、この概念への言及の数も少ないし、未だ言語そのものから分離して明確化したものとしては考えられていないと言える。

我々の関心はこれから、その後の彼の思想展開の中で、はたしてSchriftに分離して独自化した何らかの概念内容が与えられるのか、どのようにしてであるか、またどのような内容においてであるのか、に向かうことになる。そしてそれが、いわば＜書かれたもの（＝生）＞が＜書かれたもの（＝小説）＞を、SchriftがSchriftを映すという構造を作品の内奥に潜めている『特性のない男』の理解にどのように資するかを問うことにある。

「認識の言語的本質」を問うことに収斂する若き日のベンヤミンの哲学的営為は『言語一般と人間の言語』（1916年）に一つの結実を見ることになる。ここでの論は、言語の道具化、記号化、抽象化に対抗して、＜純粋言語＞というものを仮定し、事物（自然）と人間との初源的交流（コミュニケーション）を回復する、あるいは少なくとも痕跡的に残存している形姿を探り当てる感性を養う、というイデーのもとに展開される。そして、そもそもの始源において、アダムが神の呼び掛けに応じて自然の事物に名前（Name）を与えるという、その原・言語の意味するであろうことを探って行く。

ベンヤミンはそのような始源的な言語を想定することに於いて、前述の、M.ブーバー宛書簡にもあった、「魔術的」という言葉を使用するのであるが、その魔術的で無＝媒介＝的な領域は、「神秘主義的言語理論」とははっきり一線を劃するものであるとしている。この領域が、神秘思想的なものを採りこみながら且つ排除してゆくものであるという構造は、ムジールの『特性のない男』第2部での神秘主義思想の採用の仕方への理解の方式を考えるのに参考になるであろう。とは言え、甚だ理解しがたいこのイデーの意味の追究はここでは断念して、我々としては一応、アダムの言語とか神の言語とかは純粋性の関係を見、かつ描くために設えられた、＜絶対的なもの＞をどこまでも追ってゆく作業仮説である、と理解しておいてよかろう。例えば、高次の詩に現出する創造

力に満ちた言語を保証するのもとしての<純粋言語>、というように。

これから我々は、考察の輪を極く狭め、Schrift 概念を尋ねることに限定して行くことにする。今取り挙げている『言語一般…』の中で Schrift は広義の記号（Zeichen）の「特殊な一例」として言及されている。

<記号>はベンヤミンによって二重性において考えられている。一つには、記号は言語の手段的側面と結びつけられる。アダムとエヴァの堕罪と人間の言語の誕生とは同時的に起こったことであって 手段的認識がそこから始まる。ベンヤミンによると、それは善悪の判断をなす「饒舌」（Geschwätz）による言語の<奴僕化>である。このとき事物（自然）も奴僕化し、「事物がこんがらがるところでは，<記号>も混乱せざるをえない。」（B.II,S.154） これは「単なる記号」とされる。もう一つには、拡大された言語との関わりで見られた記号である。それは芸術言語という考えであって、絵画や彫刻の言語そして歌の更に詩の言語は、事物（自然）の言語を写しとり「翻訳する」あのアダム的な名前言語（Namensprache）を部分的にせよ実現していると見られる。芸術言語を理解するには「記号についての学」が必要である、

> 「なぜなら、言語と記号との関係（この関係に比すれば、人間言語と Schrift との関係は全く特別な一例にすぎない）は、根源的であり基礎的なものであるからだ。」（B.II,S.156）

さらに言語—記号という関係とは別のもう一つの関係がある。それぞれの対象は自己の精神的本質を言語的本質に移すとき、<名>（Name）という現れ方をし、人間の言葉と出会う、あるいは人間の言葉に「翻訳」される。つまり記号は、言語的なものを代理する間接的な「単なる記号」であるほかに、この<名>に近いところにあって、それを直接的にしかし偶然的に代表する、という風にも考えられているのである。この真正の記号に対して、いわば、第 2 審級の<名>として「伝達不可能なものの<象徴>（Symbol)」という概念が導入される。

> 「言語はどのような場合も単に伝達可能なものの伝達であるにとどまらず、伝達不可能なものの<象徴>でもあるのだ。言語のこの象徴的側面はそれの記号との関係と関連している。」（B.II,S.156）

Schrift はこの記号や Symbol と結びついてゆくわけだが、それについてはここでも、また別の箇所（B.VI,S.11ff. & S.32）でも「Schriftzeichen の言語との関係」というテーマ名が見えるだけで、それ以上には残念ながら展開されていない。

中期というより後期に近い時期の言語論である『類似についての説』と『模倣能力について』（共に1933年）では Schrift についてもっと掘り下げて思索されている。すでに初期言語論でも論じられた、自然のもつ言語を人間言語に「翻訳」する際の能力として、類似のものをまねて作り出すという特別の模倣能力が人間に元来備わっている、と見る。しかもそれは感性に拠らない「非感性的模倣」であるとされる。ベンヤミンは、広い意味での擬声語が言語の根底にあるという考えを持っているようである。それはアダム的言語を出発点とする言語観からすると当然かもしれない。その考えに基づくなら音声言語が言語の一次的様態であることになる。彼は言語と Schrift とを幾分かは対立的な二分法で眺めるのだが、魔術的言語と記号的言語との対立で分けた場合、［音声的］言語と Schrift とは共に魔術的言語の方に入るとしているのであるから、Schrift にも根源的な力が備わっていると考えていると見なしてよいことになる。ここでは、Schrift が読み解くべき＜判じ絵＞（Vexierbild）になる、というベンヤミン独特の解釈理論が述べられている。

「［模倣の能力によって生まれる］Schrift は、言語と並んで、非感性的類似、非感性的照応の貯蔵庫となった。（……）

かくして、Schrift の文字面のテクストが［伝達的な］基盤となって、そこでのみ判じ絵（Vexierbild）が形成されうるのである。（……）この非感性的類似は一切の＜読む＞という行為に作用するのであるから、この深層に於いては、読むという語の奇妙な二重の意味、即ち、世俗的な意味と魔術的な意味とへの入口が開くのである。」（B.II,S.208f.）

ここでは書くこと／書かれたものに対して、読むという行為が二重性において捉えられていることが注目される。Schrift の魔術的意味を読まねばならないというを意味することになる。

同時期にB．ブレヒトとの対話がもとになった日記断片『スヴェンボルン、1934年夏』では Schrift と、ベンヤミンにおいて重要なキーワードの一つである＜回想＞（Erinnerung）とが結び付けられている。回想とは事物の言語を

直接聞きとっていた幼年時代の記憶が立ち帰ってくることであり、経験の純粋で創造的な力が現在にまで通じる通り路である。F.カフカの非常に短い『隣り村』という比喩的物語の解釈をめぐっての討論が背景にある。

「人生の真の尺度は回想なのだ。(……)(この作品の)老人のように、自分の人生がSchriftに変化してしまったような人は、このSchriftを<後ろから読んで>ゆけばよかろう。そのようにしてのみ人は<自分自身に出会う>のだし、そのようにしてのみ——現在を逃れつつ——それを会得できるのだ。」(B.Vi,S.530)

人生とSchriftとの関係、そして回想の持つ意味——これは正にムジールの『特性のない男』第2部でのウルリヒと、古代エジプト神話のイシスとオシリスの対をなす神々の物語のように、「忘れさられた」、両性具有性を分かちもつ「双生児」の妹アガーテとの愛の物語の主要テーマであって、書かれたものと書くこととの多重的な意味空間ができあがり、二人が共にいるということが生み出すいわば磁場が、共に過ごした幼年時代の日々の、どちらから言いだすともない想い出をくりひろげて、それらのもつ真の意味を発見して行くのである。ウルリヒにとってアガーテは鏡像関係にある自己であり、そこで「自分自身に出会う」ことができるのである。彼らの眼前には「彼らの世界の本」(ihr Buch der Welt)が広がり 二人してそれを「読む」。[14] ベンヤミンにとっても、バロックは<書物>と結び付くものだった。

「ルネサンスは宇宙を探索し、バロックは図書館を探索する。バロックの思念は本という形になる。(……)<自然という書物>、<時(=歴史)という書物>、これがバロック的思念の対象である。」(B.I,S.320)

歴史を未来へ向けて読み解こうとする方向への努力が滲み出ている後年のエッセーにおいても，打ち捨てられたままになっている事物が描く「自然という書物」のイメージは繰り返される。「テクストのように読む」という表現に注目したい。

「自然という書物という言い方は、現実的なことはテクストのように読めるのだ、ということを示唆している。(……)われわれは、かって生じた

＜事柄の書物＞を打ち開くのである。」(B.V,S.580)

先に見たように『特性のない男』でも「世界という本」というトポス的表現が作品内在的意味を持つものであることを述べたが、現代という混乱した時代を歩むウルリヒが「失われた重大な発言」(M.S.1597) であるとすると、自然や世界や歴史といった本を読むバロック的人間は憂鬱家 (Melancholiker) である、という或る類比が成り立つであろう。

(六)

『ドイツ哀悼劇の根源』は1927年に刊行されたが、執筆は1923年から25年にかけてなされた、ベンヤミンの中期における金字塔であり、当時にあってはテーマの奇異さと叙述の難解さの故に、教授資格審査申請から外されたという事件でも有名である。印刷にして200ページに及ぶ大作の最後でベンヤミンは、次のように書く。

「バロックのドイツ哀悼劇は、アレゴリーの精神に則して、最初から＜廃墟＞として、＜断片＞として構想されていた。他の (文学的) 諸形式が、この世界の最初の日に於けるが如く赫奕たる光を放っているとすると、この形式は最後の日に於ける美の像を留めるのである。」(B.I,S.409)

負の評価にある＜アレゴリー＞を正の方向に理解しようという意図は、言語の根源にある「魔術的で、無＝媒介＝的」な精神的本質を回復せんとする初期言語論と　まさしく軌を一にしていると考えてよかろう。『バロック劇論』の最初に置かれた、真理と認識との関係を述べた晦渋な「認識論的序文」の中から、当面は、次のような点を理解しておきたい。

＜真理＞というものは、認識への単なる投影は逃れてしまうものであって、真理は「表現された＜理念＞」の輪の中に自ずと現出する。したがって、理念が表現されている個々の＜現象＞を知らねばならない。その際、諸現象は＜概念＞によって媒介されることによって理念の世界に入る。他方、理念はというと、個々の事物即ち現象が概念の中で＜配置＞ (Configuration) の形をとって組み込まれることによって表現される。そのことがまた「現象の救出」でもあるとされるのだ。Configuration は後期に多用される概念 Konstellation と

ほぼ同義であると考えてよかろう。

これを単純化して当てはめて、＜理念＞—＜概念＞—＜現象＞の関係を、それぞれ＜哀悼劇＞—＜アレゴリー＞—＜作品＞（あるいは個々の言葉、劇の上での事象)、に対応させて考えると多少解りやすくなるように思われる。ベンヤミンは＜表現＞の方式として＜トラクタート＞の方法を挙げる。それは中断や不連続の迂回をもった方法であって、細片でありながら全体を表わすモザイクにもなぞらえられている。

ここで注目されるのは、ベンヤミンが、そのような思考断片の場所として、「中断」や「不連続」や「迂回」と関連づけられているとして、音声言語に対置させられる Schrift に着目している点である。そこには、敢て言えば、言語の音声的側面よりも文書的 Schrift 的側面にウェートを置こうとしている、思考プロセスが見て取れる。そして『哀悼劇』論の中心的概念であるアレゴリーと Schrift とが結びつけられている。意味内容や脈絡を失って理解不可能となって、ただ意味する形式として、表現としての姿をさらすアレゴリーは、，物々の散乱する廃墟になぞらえられた。メランコリックな観想は「死せる事物を救出する」(B.I,S.334) べく取り挙げるのである。

「アレゴリーは遊戯的なイメージ技法ではなく、言語の如く、いな、Schrift の如く表現である。(……) アレゴリーは Schrift と本質的には異ならない。」(B.I,S.339)

「アレゴリー的洞察は事物や作品を一瞬にして刺激的な Schrift に変えてしまう。」(B.I,S.352)

「この事態は心理学的ではなく、存在論的である。アレゴリカーの手によって事物は何か別のものに変ずる。(……) それは、彼にとって隠された知の領域への鍵となる。このことによってアレゴリーは Schrift 性格をもつこととなる。アレゴリーは一種の図式（シェーマ）である。」(B.I,S.359)

「音声言語と文字言語とは、何らかのやり方で近づけるべきだが、正しく弁証法的に、つまりテーゼとアンチテーゼとして確認されねばならない。(……) Schrift が直に言語音声からでなく、音楽から、いかに生まれ出るかを研究すべきなのだ。(……) Schrift 自体には何かに奉仕するというものは備わっていず、また読む際に燃えかすのように剥離してしまうのでもない。 Schrift は読まれた内容の中へ、その＜図形＞（Schema）として

入り込むのだ。」(B.II,S.388)

このようにアレゴリーという世界洞察の方法をもってすると、根源的であると考えられる音声言語よりも文字言語の方にこそ意味救出の方式が存する。Schriftが弁証法的緊張をおのれの中に内在させているからである。それは、後年ベンヤミンがさまざまな角度から検討を加えた、「弁証法的形象」とか「静止状態の弁証法」という独特の概念に繋がってゆき、彼の一つの中心的イデーとなってゆく。

『パッサージュ』という表題のもとに刊行されることになる、或る著作の構想のための夥しい量のメモ・グループ<N>の中で繰り返し言及されている。そこでは、Schriftという概念は影をひそめ、先の引用で「<図形>(Schema)として入り込む」とあったように、いわば潜伏し、そのため「形象」や「引用」を<読む>、という思惟の行為が表に出て来ることになる。<形象>と<言語>の関係はより深い関連で考えられる。またベンヤミンは,「引用符のない引用文」の配置によって、『パサージュ』を書きあげることを夢想もした。

「形象こそ、かって在ったものが<今>と閃光の如く出会って、一つのKonstellationを作る場である。換言すれば、形象は静止状態の弁証法である。(……) 弁証法的形象のみが真正な形象である。そしてわれわれが形象に出会う場所が<言語>なのである。」(B.V,S.576f., N2a.3)

「歴史家を取り巻いており、彼が関与している出来事の数々は、炙り出しインクで書かれたテクストとして、彼の叙述の根底に横たわることになる。彼が読者に提示する歴史は、いわばこのテクストにおける<引用>となっている。」(B.V,S.595, N11.3)

ベンヤミンの<歴史>像は過去の独特の賦活の方法にある。それは上掲の引用文にもあるように、<今>(あるいは<今のこの時>Jetztzeit)と閃光の如く出会う過去のものが弁証法的形象となり、そのような形象が、それ以外の方法では現われ得ないような新しい関連性のもとに何かを開示し始める。抽象的な概念操作では捉え難い、形象が作り出す意味の開示の方式が<星座的配置>(Konstellation)と名付けられるのである。そのような形象との出会いの場が<言語>であることがベンヤミンによって確認されている。

この<言語>は、すでに実現した書かれたもの(Schrift)であるばかりで

なく、実現可能態としての＜言語＞ということになろう。ということは、＜言語＞自体にそのような弁証法的形象を宿らせる創造的力が内在しているということであって、初期言語論の時期に考えられていた「魔術的」「非＝媒介＝的」特性において見られた言語である。そこには当然 Schrift も入ってくるわけであって、その場合の Schrift は最も広い意味でとられた場合の Schrift ということになり、＜言語＞にとってのモデルとなるのだ、と考えてもよかろう。『ドイツ哀悼劇の根源』でアレゴリーのSchrift性格が言われたように、Schrift のもつ形象性が、言語と深く結びついた存在（Sein）の＜今＞に立ち帰ることの根源にあるのである。

我々は今ここで、ベンヤミンの『カフカ論』（1933年）を思い出してよかろう。カフカは、読み解くべき謎のごとき事物や動物の数々を、そしてまた言語とは異なる、合目的性とは異質の伝達性を持つ＜身振り＞の多様さを、彼の創作の定数とした。そのことにカフカの創造原理の一つがあることに逸早く気づいた一人がベンヤミンであったことは改めて述べるまでもない。

「現存在を Schrift に変ずる勉学の方向は、一種の逆転である。」(B.II,S.37)

勉学とは、過去についての＜忘却＞に抗して行なわれる＜騎行のごときもの＞であって、現存在と Schrift との逆転をも含む行為である。

このように過去のものを賦活するという観点からの歴史観は歴史主義と真っ向から対立するものである。ベンヤミン独特の史的唯物論が述べられている。

「歴史主義が、過去の永遠の形象を叙述するのであるのに対し、史的唯物論は過去に関しての、唯一存在するその都度その都度の経験を叙述する。構築的要素によって＜叙事的要素の囲みを解くこと＞――それこそこの経験の条件である。（……）おのおのの現在にとって根源的である、歴史についての経験――それが史的唯物論の課題である。」（B.II,S.468）

＜過去の事物を賦活する＞、＜現象を救出する＞という独特の方向で史的唯物論を考えたベンヤミンには、＜叙事的なもの＞へのアンビヴァレンツがある。それは複製芸術時代にあっての芸術の大衆化にともなう＜アウラ＞の消失へのアンビヴァレントな思いと共通している。強いて言えば、現代の状況が叙事的なものの内実を簒奪して虚偽化している、その＜囲みを解いて＞、遥か彼方の

新たな地平で叙事的なものの蘇生を期するかのようだ。

ムジールに於いても、ベンヤミンとは異なる方向ではあるが、＜叙事的なものの解体＞が主人公ウルリヒの生き方に関して、と同時に作者ムジールの創作方法に係わって意識された。現代の文明の諸制度／システムが叙事的なものを取り込んで、＜同じようなことが起こる世界＞を現出させ、人間を脱色してゆくことへの洞察がある。それはアウラの喪失と同じく、痛みを伴うとともに新しい地平を暗示するものでもある。ウルリヒは自らの様々な体験を総括するように、あの悪名高い「人生の抽象化」について、そして人生を形作る「叙事物語の永遠の技法」の不可能について思いを致す。(Cf.Br. S.724ff.)

「(……) この人生の法則というのは (……) 物語の秩序の法則にほかならない、という思いが彼の心をとらえた。(……) 空間と時間の中で生じた一切のことを一本の糸の上に、正にあの有名な「物語の糸」の上に並べることなのだ。」(M. S.650)

ウルリヒは、大方の人間はいまだに自分自身への根本的な関係に於いては「物語る人」であるのに対して、公的な世界では一切が非叙事的になって、「無限に織りなされた平面」に拡散してしまっていることを認識する。物語的に見えている世界とは、実は「幽鬼」(Gespenst) にほかならない。(Cf. GW. 7, S.39／Br. S.726, u.a.)

「そしてウルリヒは、自分にはこのプリミティヴに叙事的なものが失われてしまったことに気づいた。」(M. S.650)

＜無限に織りなされた平面＞という、時間的及び論理的非・直線性は、D. ハイトに倣って言えば、西欧的思考とは別の時間・論理概念であって、「Schrift の思考」へと向かうのである。[15] そこに「諸連関の一種無限な体系」が生まれているのであって、

「一見固定的なものは、それとは別の多様な意味への透過的な口実に過ぎなくなり、生じた事柄は、ひょっとすると起こらなかったかもしれないが、しかし感じ取られた何事かの＜シンボル＞になる。そして自らの現存在の書かれざる＜詩＞が、人間の中の潜在的なものが、＜文書＞ (Nieder-

schrift）となって、彼に相向かっている。」（M. S.250f.）

テクストは無限に織りなされたもの（Textur）となる。現代の文学的テクストの概念の新たな地平を拓いたR．バルトは、その特質を「意味の固定の拒否」において見る。[16] そのような「<テクスト>は<織物>という意味だ。(……)この織物の中に迷い込んで、<主体>は解体する。」[17] また、「テクストとは、無数にある文化の中心からやって来た<引用>の織物である。」[18]

<引用>ということでは、もう一つムジールとベンヤミンとの或る共通点を見出すことができる。ムジールは日記に「或る人物を全く引用で合成する」という方法を述べている。（TB. S.356） この一見手軽と見える方法は、H．アルンツェンが言うような[19]、諧謔的（satirisch）に現代社会を裁断するためだけのものではない。例えば、アガーテの神秘思想の引用はsatirischではない。仮定としては、全てが<無数の文化の中心からやって来た>引用文でできた小説も考え得るであろう。

ベンヤミンも「引用符なしの引用」で『パサージュ論』を書こうという方法意識があった。（B.V, S.572, N1,10）先のR．バルトは、流動化して読める現代のテクストを「引用符のない引用」としている。[20] そのベンヤミンが『カール・クラウス論』（1931年）では、K．クラウスの文学活動に於ける方法として<引用>が持つ意味を、自分の独特の言語観に引き寄せつつ考察している。

「<引用>は，語を<名>によって呼び出し、そしてその語を破壊することによって、その連関から引き離す。しかし、まさにそうすることによって、語をその根源へと呼び戻しもするのである。(……)

絶望した人間にして初めて、<引用>の中に、保守する力でなく、浄化する力、連関から引き離し、破壊する力を発見したのである。その力にのみ、幾つかはこの時代を脱して生き延びるものがあるという希望がなお存している。」（B.II, S.363／365）

（七）

われわれは、Schrift概念をキーワードとすることによって、ムジールとベンヤミンとの共通性に或る程度迫り得たと思われる。最後に、この両作家におけるSchriftの意味を考究した研究者らの発言を纏めておくことにする。固よ

り、冒頭において述べたように、交点の欠けている両者を比較して論じた研究論文は皆無に近いのであって、併記するだけでは何もならないが、それぞれの研究者の独立した考察が示す共通性は、少なくともムジール文学の中心的特質の一つを充分に示唆するものとして、取り出すことができるのである。

先ず、ムジールに関連して。D．ハイトの非・直線的な「Schrift の思考」については既に触れておいた。ハイトは、ムジールが明かに意識してそのような理論に立脚したわけではありえないが、と留保しつつ、バルトやデリダ、さらにはラカンの理論を根拠に「閉じた本とは逆に、Schrift が抬頭してくる」ようなムジールの書き方を指摘している。[21] 彼が1980年発刊の著書で行なったこのような関連づけは、ムジール研究に関してのみでなく、ドイツ文学研究分野でもかなり早い時期に属する。その後に，H.-G.ポットがムジールの文学の根底に「生＝テクスト」という存在様式を想定した。[22]

「書くということは、内面に潜む Schrift を筆記することである」と、P．ヘンニンガーが言っているのは、人間の意識存在と Schrift との結び付きを、さらに無意識の領域にまで深く探り、作者ムジールその人の＜書く＞ことの発動の原点を見ていっているのである。[23]

H.-J.フェルゼは、支配的言説に搦めとられた＜真実＞を意味することから逃れるべく、意味内容を持たない意味形式（シニフィアン）としての Schrift が本来の＜真実＞を開示しうる可能性を、デリダの理論に依拠しつつ、アドルノ／ホルクハイマーの『啓蒙主義の弁証法』にも方法論的に近いものであることを指摘する。[24] 彼は述べていないが、アドルノらに多様な示唆を与えたのが他ならぬベンヤミンであった。

G.マイゼルも、先のH.-G.ポットを引証して、ムジールにおいて「Schrift の特権性が人生を証言し、忘却から守る」ものとして考えられている点を考察している。彼の論の更に興味深いところは、狂ったクラリッセという存在と＜言語＞との関係に言及している箇所であるが、我々も上の方で触れたように、この関係はまた主人公ウルリヒ及び作者ムジールが媒介することでさらに複雑化してくるのである。[25]

また、M．シュミッツ-エマンスは、ムジールの言語使用の特質として＜多義性＞、＜二重性＞、＜類似性＞、＜不確定箇所＞、＜パラドックス＞などを挙げた上で、テクストの果てしない「書き換え」（Umschreibung）の原理を指摘する。それらはムジールにとって「＜言語＞それ自体について語る為の戦

略」なのである。このようにして、「言われたことの<下方に>、また<間隙に>言語が到達しえない<根底>が予感される」ことになるのである。かくしてテクストは書かれた内容とは別の「独自価値」をもつことになる。彼女は、「言い表わせないこと」の周りにSchriftが残す痕跡をSchriftspurenと呼んでいる。[26] 既に上で見たようにベンヤミンにも、この「言い表わせないこと」を指示するために言語の、そしてSchriftの<非－媒介－的>な要素を捉えようとする試みがあった。そのことは、彼がアレゴリー化する<形の優勢>を重視し、また『翻訳者の使命』(1921年)で「意味の仕方」(Art des Meinens)を重視していることと一致するのである。

次にベンヤミンに関連する研究者の発言を見て行こう。上述のように、<アレゴリー>のSchrift性格を洞察したベンヤミンに於いてSchrift概念の重要さを見いだすのはたやすいことであって、当然それへの言及は大なり小なりどこにも存在するのだが、問題は果たしてSchrift概念がどのように深められ拡大されたか、であろう。ムジールに関しても、ハイトなどが「存在記号論」(Ontosemologie)という、ハイデッガー哲学を淵源とするデリダ理論の中の<エクリチュール>概念に論者たちは依拠しようとしているのだが、それとベンヤミンのいうようなSchrift概念との単純な同一視はできないとせねばなるまい。しかしながら、両概念を近づけ重ね合わせてみることによって、概念に豊さが生じているのもまた事実といえる。方向としてはよいのである。

先ずドイツ初期ロマン派の文学観とデリダ理論とを直に結びつけ、ベンヤミンをデリダの先駆者として捉えたW．メニングハウスを挙げるべきであろう。注目すべきは、彼が、デリダに於いて<記号存在論>を確立するために、ほかの幾つかの概念装置は有効であるが、< Schrift＝エクリチュール>概念は不備を否めないとしている点である。[27] この問題にこれ以上入り込む準備が筆者にはないが、今述べたように、やはりこの概念の豊かさを引き出すべきであろうと思うのである。

ベンヤミンの言語観に関して多面的で浩瀚な著書を著したB．メンケは、「描出」という一種の<迂回>(Umweg, B.I,S.208)によって「真理」に到達しようとするベンヤミンの根本的な見解をもとに、デリダ理論に依拠しつつ、次のように書く。

「解釈する<描出>は一種の書き継ぎであり、諸解釈、意味層、Schriftの

不断の追加である。それは，意味の＜延期＞、――ベンヤミン自身の驚嘆すべきラディカルな言い方では――＜意味の克服＞である。」[28]

J．フュルンケースも、ベンヤミンに於けるSchrift概念の独自性、とりわけ、読み解きと＜描出＞ないし＜表現＞との関係に着目している。「Schriftや疎外された意味痕跡、歴史の不連続性のアレゴリカルに欠落のある普遍性」が、意味や歴史的連続性に固執する解釈学派の主張する＜普遍性＞と相対立するものとして、意義あることを強調する。[29]

ベンヤミンは、初期ロマン派ノヴァーリスの、「真の読者は拡大された作者でなくてはならない」とする読者論を採り入れている（B.I,S.68）。そこにはSchriftに現れるアレゴリーを読む＜メランコリカー＞の系譜を受け継いで、周縁的で、見捨てられ、忘れられたものを＜読む＞という、いわば使命の意識がある。そこからK．シュティールレは、読者による＜テクストの実現＞のために、断片的・アレゴリー的な＜読み＞という概念を引出してくるのである。そして彼は、ベンヤミンの＜経験＞概念にとって本質的なのは、「言語的に、記号的媒介された経験」であるとしている。[30]

同じように、D．ドイリングも、「現存在がSchriftに変ずる」としたベンヤミンの『カフカ論』の発言にもとづいて、Schriftが忘却と想起とに同時に係わる経験の言語化であることを捉え、Schriftと化した意識において人生が＜読み得る＞（lesbar）なることによっての或る種の＜救済＞となる、とするアイディアを取りだしている。[31]

以上、それぞれ別個に論じられた、ムジールとベンヤミンとにおいて、言語と存在が、Schriftと意識が、深く係わりあっている所へ向けて、生の＜真理＞を探ろうとするというある共通性と言えるものが存することが見て取れた。このような観点から、ムジール文学を考察すべきであろうと思われるのである。次のJ．キューネの言葉の中の＜静物画＞という語を、芸術一般、文学一般、そしてSchriftに置きかえてみることができよう。

「静物画の本質的な魅惑は、その中で何か本質的に見えないものが自らを開示するところにある。」[32]

―了―

<註>

ムジール（Robert Musil）の作品（引用は（ ）内に記号とページ数で表わす）

M.……*Der Mann ohne Eigenschaften*, hrsg. von A.Frisé, Hamburg, 1978

GW.1～9……*Gesammelte Werke in neun Banden*, hrsg. von A.Frisé, Hamburg, 1978

TB.……*Tagebücher*, hrgs. von A.Frisé, Hamburg, 1976

Br.……*Briefe* (*2Bde*), hrgs. von A.Frisé, Hamburg, 1981

ベンヤミン（Walter Benjamin）の作品（引用は（ ）内にBとその後ろに巻数をローマ数字、ページをアラビア数字で表わす）

B.……*Gesammelte Schriften* Bd.I～VII, hrsg. von R.Tiedemann und H.Schweppenhäuser, Frankfurt a.M. 1981

B.Br.……*Briefe, 1 & 2*, hrsg. von G.Scholem und Th.W.Adorno, Frankfurt a.M. 1978

1）拙論:「《比喩》と《アレゴリー》、R．ムジールとW．ベンヤミンにおける言語観の比較」山口大学教養部紀要（人文科学篇）第28巻（1994）所載。

2）Böhme, H: *Die Zeit ohne Eigenschaften und die Neue Unübersicht-lichkeit. Robert Musil und die posthistoire.* In: *Musil-Studien 14*, München 1986, S.30

3）ロラン・バルト:「作品からテクストへ」『物語の構造分析』（花輪 光訳）みすず書房 1979年 98ページほか

4）ロラン・バルト:「読書について」『言語のざわめき』（花輪 光訳）みすず書房 1987年 57ページ

5）ロラン・バルト: 3）99ページ

6）Pekar, Thomas : *Die Sprache der Liebe bei Robert Musil.* (Musil-Studien19) München 1989, S.171

7）Hörisch, Jochen: Das Sein der Zeichen und die Zeichen des Seins, In: Hörisch: *Der andere Goethezeit,* München 1992, S.163 f. u. 147 f.

8）Hörisch, J.: *Objektive Interpretation des schönen Scheins.* In: *Walter Benjamin, Profane Erleuchtung und rettende Kritik,* hrsg.v.

N.W.Bolz & R.Faber, Würzburg 1985, S.59

9）拙論:「R.ムジールの『特性のない男』とF.シュレーゲルの『ルツィンデ』」 山口大学教養部紀要（人文科学篇） 第26巻（1992）所載。

10) Bröcker, Michael: *Die Grundlosigkeit der Wahrheit, Zum Verhältnis von Sprache, Geschichte und Theologie bei Walter Benjamin.* Würzburg 1993

11) Bröcker, M.: op.cit. S.32／34

12) Bröcker, M.: op.cit. S.33

13) Maier-Solgk, Frank: *Sinn für Geschichte, Ästhetische Subjektivität und historiologische Reflexion bei Robert Musil.* (Musil-Studien22) München 1992, S.279

14) 拙論:「<世界の書> Buch der Welt, 或る文学的トポスのムジール作品での意味」 山口大学教養部紀要（人文科学篇） 第23巻（1989）所載。

15) Heyd, Dieter: *Musil-Lektüre: der Text das Unbewußte.* Frankfurt a. M. 1980, S.55

16) ロラン・バルト:「作者の死」『物語の構造分析』（花輪 光訳）みすず書房 1979年 88ページ

17) ロラン・バルト:『テクストの快楽』（沢崎浩平訳）みすず書房 1978年 120ページ

18) ロラン・バルト:「作者の死」上掲書 85ページ

19) Arntzen,Helmut: *Zur Sprache kommen, Studien zur Literatur- und Sprachreflexion, zur deutschen Literatur und zum öffentlichen Sprachgebracuh.* Munster 1983, S.255

20) ロラン・バルト: 「作品からテクストへ」 上掲書 99ページ

21) Heyd, D.: 15) a.a.O. S.55

22) Pott, Hans-Georg: *Robert Musil.* München 1984, S.157

23) Henninger, Peter: Die Wende in Robert Musils Schaffen. In: *Robert Musil, Essayismus und Ironie.* Hrsg.v.G.Brokoph-Mauch, Tübingen 1992, S.95

24) Völse, Hans-Joachim: *Im Labyrinth des Wissens, Zu R.Musils Roman《Der Mann ohne Eigenschaften》.* Wiesbaden 1990, S.78f.

25) Meisel, Gerhard: *Liebe im Zeitalter der Wissenschaften vom Menschen. Das Prosawerk Robert Musils.* Opladen 1991, S.126 & S.193ff.

26) Schmitz-Emans, Monika: Das Doppelleben der Wörter. Zur Sprach-reflexion in R. Musils "Vereinigungen", In: *Robert Musil, Dichter, Essayist, Wissenschaftler*. Hrgs.von H.-G.Pott, München 1993, S.94 & S.111 & S.120
27) Menninghaus, Winfried: *Unendliche Verdopplung*. Frankfurt a.M. 1987, S.123
28) Menke, Bettine: *Sprachfiguren, Name−Allegorie−Bild nach Walter Benjamin*. München 1991, S.273
29) Fürnkäs, Josef: *Surrealismus als Erkenntnis −Walter Benjamin, Weimarer Einbahnstraße und Pariser Passagen*. Stuttgart 1988, S.198
30) Stierle, Karlheinz: *Walter Benjamin und der Erfahrung des Lebens*. In: Poetica, 1980, S.227～S.248
31) Deuring, Dagmar: 《*Vergiß das Beste nicht!*》, *Walter Benjamins Kafka-Essay: Lesen／Schreiben／Erfahren*. Würzburg 1994, S.33 & S.65
32) Kühne,Jorg: *Das Gleichnis, Studien zur inneren Form von Robert Musils Roman* 《*Der Mann ohne Eigenschaften*》. Tübingen 1968, S. 131

上記のほか、J．デリダの『グラマトロジーについて』（足立和浩訳 上・下 現代思潮社 ）と『エクリチュールと差異』（坂上 他訳 上・下 法政大学出版局）も適宜利用した。